

みあかり



御樋代木奉迎祭 於 桑名神社・中臣神社

目次

- 靖國神社の沿革・英霊顕彰について
- 宇治神社 弓の事始式
- 大井神社 ～大蛇伝説と歩散神事～
- 一御田神社 御田植祭
- 吉田神社 朔日参りの榊
- 結城神社のしだれ梅

教化特集号 第33号

三重県神社庁
庁報編集委員会

靖國神社の沿革

英霊顕彰について

靖國神社宮司

大塚海夫

【御創建の経緯】

靖國神社は、明治二年に明治天皇の思召しにより創建された。阿片戦争以降、東アジアに吹き荒れた欧米帝国主義による植民地化に対抗するため、いかに国力を高めて独立を維持するかが、当時の日本の課題であった。その方法論を巡る対立は、国内を二分する戊辰戦争に至った。

明治二年、この戦争で戦歿した三千五百余柱の英霊を祀るため、九段坂上に仮本殿・拜殿が造営され鎮座祭を斎行した招魂社が、明治十二年に靖國神社と改称されて今日に至っている。「國を靖んずる」とは、國に平和をもたらすこ

とを意味し、靖國神社はその名のおり「平和の社」なのである。

二百六十年続いた幕藩体制下で、国といえは藩を意味した。鎖国政策を捨て弱肉強食の国際社会に船出することを余儀なくされた日本にとって、欧米に伍して独立を守ることは急務であった。そのためには、天皇陛下を中心とした国民国家をつくること必至であり、新国家体制建設のために一命を捧げた兵士に対する、東京の招魂社での国家としての慰霊・顕彰は、その象徴的行為だったのだろう。自衛官に任官する際、「事に臨んでは危険を顧みず身をもって責務の完遂に努め」という宣誓をする。

「命を懸けてもよい」という前提で日々を過ごすのは決して楽なことではない。自分自身では折り合いを付けられたとしても、部下にそれを求めるのは並大抵のことではない。今日、国会において自衛官の処遇改善が議論されているが、他の業態には無い「命を懸ける」という行為に対して、当の自衛官が最も期待することは、私の四十年間の自衛官としての経験上、万が一、国のために尽くして斃れた場合、国家国民がその行為を忘れずにいてくれることだと思ふ。

明治維新に至る過程で歿した侍は、藩ごとに招魂祭を行ってその霊を鎮めた。他方で、新しい国家体制の下で、国家として戦死者の慰霊顕彰を行ったことは、世界の先駆けでもあり、画期的だったと言えよう。

【英霊祭祀】

明治十年の西南戦争を以て、国内の不安定要因はほぼ無くなる。

以後、神社に祀られる御祭神は、日清戦争から大東亜戦争にかけて、外国との戦いに際して、國のために尊い命を捧げた方々となり、今日、合わせて二百四十六万六千余柱の英霊をお祀りしている。

靖國神社に祀られる御祭神は、戦死者が生ずる都度、陸海軍部隊の指揮官が陸海軍省に上申し、各大臣から天皇陛下に上奏して、御裁可を得た上で、名票が神社に送られることとなっていた。靖國神社では、その名票に基づき戦死者の「みたま」を招魂し合祀祭を行ってきた。

大東亜戦争における戦死者は全御祭神の九割以上を数え、その大多数の合祀が行われぬまま終戦を



みたままつり風景

迎え、混乱の内に占領下での日々が流れた。

占領軍の「神道指令」による政教分離という新しい概念が持ち込まれ

政府が直接、靖國神社に合祀の指示を出す立場になくなったことから、靖國神社が英霊の合祀を続けることは不可能かと思われた。しかし、国民、就中、御遺族の悲願として、一刻も早い合祀が求められており、政府は可能な限り靖國神社に協力するという方針を取った。

既に陸海軍省は消滅していたが、復員省、その後は厚生省が戦没者遺族に関する事務を引き継ぎ、その業務の一環として靖國神社にも祭神名票が送付されることとなり、昭和三十四年までに、ほぼ合祀が概成する運びとなった。国家の祭



8月15日境内風景

祀を行ってきた神社が、戦後の占領政策により突然、宗教法人になることを余儀なくされ、政府との関係を断たれた。しかし、英霊の合祀に関しては、政府がどなたを御祭神としてお祀りするか決定し、また、靖國神社がその方を御祭神として合祀することで、それぞれが戦前と変わりなくその責任を果たしてきたのである。

【「平和の社」としての靖國神社】

靖國神社は、国事に殉じた人々を奉斎し、永くその祭祀を齋行して、その「みたま」を奉慰し、その御名を万代に顕彰するという役目を尽くすことで御創立の精神を体現してきた。本年度大東亜戦争終戦八十年となるが、今日の国際社会で、八十年間の長きにわたり、まったく武力紛争に関与してこなかった主要国は日本を始め数えるほどしかない。

英霊の遺書を拝読すると、次の世代の日本が平和であることを

願って散華された方々が多いことに気付く。英霊が自らの命の代償とした平和を享受する「次の世代」に生きる我々に課された務めは、この平和を更に次の世代に引き継ぐことである。世界価値観調査によると、「戦争が起きたら国のために戦うか」との問いに「はい」と答えた割合は、日本は七十七か国中の最下位で十三・二%だった。平和が長く続くと、それが与件と思ってしまう、戦争自体を想像できなくなってしまうのだろう。「治に居て乱を忘れず」と言うが、言うは易く行は難しい。それでも、昨年のオリンピックで若きメダリストが、帰国したら特攻記念館を訪ねて、今日の生活が当たり前のものでないことを実感したい旨を話していたのを聞くと、日本人が「平和ボケ」していると言うのは当たらない。

日本に八十年の平和をもたらした米国による平和「バックスアメリカーナ」に陰りが見える今日、改めて、平和を創り維持するには、時

間もお金も、そして時に命もかかるのが世界の常識であることに思いを致す必要がある。このような時にこそ、靖國神社を訪れ、命を懸けて平和を護ろうとされた英霊の事績を辿ることで、御祭神に感謝するとともに、平和の尊さを改めて実感し、お一人おひとりが平和を創っていくことへの思いを新たにしていただければ幸甚である。そこに、英霊の奉慰顕彰に加えて、「平和を愛する日本人の心」を体現する「平和の社」靖國神社が果たすべき将来に向けた役割が見出せよう。神職一同、全身全霊でその務めを尽くす所存である。



桜花の季節境内風景

宇治神社 弓の事始式

伊勢市宇治今在家町に鎮座する宇治神社(中山貴生宮司)では、毎年一月十七日に弓の事始式が行われている。本殿にて祭典を執り行った後、旧社殿地跡に設置した鬼の的に向かって矢を射ることによって邪気を祓い、国家の安寧をはじめ家内安全や五穀豊穡を祈るお祭りである。



日本では古来より一月十七日に射礼(じらい)という宮中儀式があり、奈良時代頃から朝廷の年中行事として祭祀や式典などの場での射る儀式が行なわれるようになった。現在でも弓射祭・弓始祭・奉射神事など様々な呼び方で全国的に行われている。

宇治神社における弓の事始式は、元和年間(一六一五〜一六二四年)に始まったとされる。その頃は青竹の弓に蓬の矢を番い、檜皮で編んで作った的に、鬼の文字を記して射たという記録が残っている。

面白いことにこの神事では、古くから「鬼神を怒らせない為に命中を喜ばず、単的に向



かって矢を放つにとどめた」という言い伝えが残っている。鬼を射て災厄から逃れる趣旨から考えると本末転倒の感もあるが、鬼(隠)の部分が「陰」は消し去ることができず、抑えながらも調和を図っていくという捉え方をしていたのかも知れない。或いは、当たらなかった者への慰めの言葉から来たものとも考えられる。

弓道には「皆中」という言葉がある。四回射って全て当たることを目指す、その四射を全て当てるための極意も伝わっている。一射目は「技術」で、二射目は「体力」で、三射目は「精神力」で当てる。そして四射目は「人格」で当てる、というのである。人格が磨かれていくと「当てる」という意志すら必要なくなり、自ずと「当たる」結果に導かれる。

「術」が技や表現を鍛えるものとするれば、「道」は心や魂を磨きあげるものである。美しい所作を身につけ、それを自らの内面に呼応さ

せることで、人格を高めていく道の精神を尊んでいくことこそ、先人たちから受け継がれてきた日本の大切な伝統であり文化である。それは神社へのお参りも同様であり、清らかな心で感謝と祈りを捧げていれば、願わずとも神様の方からお導きがあり、気が付けば相応しいところにたどりついているものである。

御祭神でもある菅原道真公の和歌にも、このように詠まれている。心だに誠の道にかなひなば
祈らずとも神や守らむ

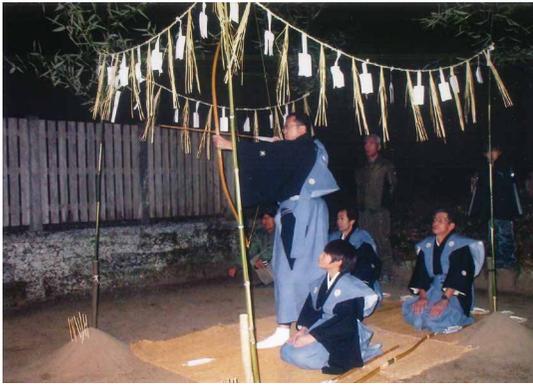


大井神社

大蛇伝説と歩散神事

津市一志町大仰おほのきに鎮座する大井神社（北出清宮司）には、古来大蛇伝説が伝えられており、この伝説に因む龍の御霊みたまが祀られています。

言い伝えによると、その昔、大仰の里に二頭の大蛇が住み、時々里に現れては田畑を荒らし里人を



おびやかし危害を加えていたとされています。里人等は手に手に弓矢や刀、槍、鉞・鎌くわを持ち三日三晩この蛇と戦つて漸く調伏し、一頭は権現湖ごんげんこの底に、一頭は里の北西の丘にある蛇山の岩穴いひやまに追いつめ封じ込めてしまいました。ところがその後この大蛇は、雲蒸龍變うんじょうりゅうへんすなわち水を興し雲を呼び龍となつて天に昇つて行ったといいますが、それを見た里人は、天に昇つて神となった龍の御霊を迎えて龍藏神社りゅうざうとして大井神社の境内でお祀りしたとされています（その後明治時代に龍藏神社は大井神社に合祀されました）。

爾来、大井神社ではこの伝説に因んで、毎年一月十五日（現在は一月第二日曜日）早朝に、悪霊退散・村内平安・五穀豊穰を祈願す

る歩散神事と呼ばれる弓曳神事ゆみひきを行っています。

この神事では、大仰の里にある四つの字あざから一軒ずつ選ばれた四人の者が組を作り、兄弟分となつて氏神年番を引き受けます。年番は大晦日に神社に籠り、また神事に際しても前日から宮籠りして清潔齋いじします。そして当日は早朝から古式ゆかしく袴・袴姿かぶらで神前に着座し祓いを受け、その後兄弟分の固めの盃を交わして社前で大射おおまを射る弓曳神事に臨みます。狙うま的は二十メートル程離れた場所に置かれた直径一・五メートルの大的で、これに向かつて各人二射ずつ二回、合計四射射ます。的は紙で



出来ているので的

中すると、パンツッ！と鋭い音を立て、それと同時にドーンと命中の大鼓が鳴らされ、見物の群衆からワツとどよめきがかかります。矢的の中・不的の結果は問わず、里人総出でこの神事を行うことが目的とされており、明るい雰囲気の下に神事は行われます。なお、神事に携わった四人は、これを機縁に兄弟分としての付き合いを続け、村の吉凶の際には共に助け合っていく習わしとなっています。

この神事を司る北出宮司は「蛇山は現在も里に残っています。古くから伝わるこうした古式豊かな神事を里人の力を得て今後も残していきたいものです」と笑顔で話してくださいました。



いちみた おたうえさい 一御田神社の御田植祭

津市一身田町に鎮座する一御田神社（脇田匡宮司）では毎年五月

に「御田植祭」が執り行われている。近くには真宗高田派本山専修寺があり、神社周辺には専修寺文教施設が設置されていたことから天満宮が勧進されるなど関係は深い。正確な創建は不明であるが、棟札の中に嘉吉元年（二四四一）の物が残されていることから、専修寺より以



前に地域信仰の対象であったことが伺える。

一般的に広く知られている御田植祭は神社が指定した水田や所有する田を神田とし、早乙女達が田植えを行うという神事だが、一御田神社の御田植祭は境内で、田に見立てた畝を砂利で作り、苗の変わりに松葉を使い、早乙女が田植えの所作を行うという特殊神事である。このように境内にて御田植の神事が行われるのは珍しい。

この祭りの主役は稚児たちである。当日、楽師を先頭に役員、祭員、稚児たちが神社を出発し、氏子域にお披露目と祭りの始まりを知らせる。神社に稚児たちの行列が戻ると、祭典が始まる。お祓いを受けた後、稚児たちが祭員に神饌や御田植神事で使う松葉を神職に手渡す。献饌、祝詞奏上、玉串拝礼の後、

稚児たちが楽に合わせ、舞を奉納、撤饌と続き、祭典は終了する。

祭典終了後、いよいよ



御田植神事が始まる。早乙女の衣装に着替えた稚児たちが苗に見立てた松葉を植える所作を行い、地域の豊作と平和を祈願する。植えている間、神職が御田植歌を奉唱する。その御田植歌は、一御田神社が古くは梵天宮と称されていたことから「大梵天皇御田歌」として室町時代の板書が残されている。この板書は津市の文化財に指定されている。

一身田町は四地区あり、毎年持ち回りで御田植祭を奉仕する。稚児も担当地区から選ばれ、舞の練習や祭典の奉仕、衣装合わせなど親御さんも含めてその大変さは想像に難くない。

祭りの存続には地域の協力が欠かせない。祭り当日、神社周辺ではフリーマーケットやバザー、商工会の青年部たちによるアトラクションや、幼稚園利用者たちの子供服などの交換会が開かれ、たくさんの氏子たちで賑わう。フリーマーケットは昨年からは始まり、豊作を祈願する祭りでもあり、地域の農作物を販売している。祭典を神事だけで終わらせるのではなく地域と協力し、地元住民に喜んでもらえるイベントとして定着できるように取り組んでいる。

現在、祭りの保存会はこの特殊神事が市の無形民俗文化財に登録されるよう、戦前の史料を集めている。一御田神社の御田植祭が後世にまで伝わるための取り組みの一環である。祭りを時代に合わせて変えながら大切な伝統を残していくこうとする姿勢は、祭りの単なるイベント化や祭典の縮小など様々な問題がある中、一つの解答として私たちも見習っていききたい。

吉田神社

ついでに 朔日参りの榊

四日市市八王子町に鎮座する吉田神社（中島千晶宮司）では、毎月一日、参拝者に神棚用の榊をお持ち帰りいただけるようにしています。

これは昭和四十五年頃、先々代の中島忠勝宮司が、月次祭に参列されていた総代や崇敬者に玉串と



して供えた榊を祭典後にお渡ししていたのが始まりだそうです。吉田神社の御神域は吉田山を中心に約六千坪あり、檜、杉、桜、榊など豊富な木々に囲まれており、特に榊が多く自生しています。そこで先代の中島清光宮司は月次祭に参列される総代や崇敬者だけでなく、毎月一日にお参りをされる氏子崇敬者の方々にもご家庭の神棚にお供えいただけるようにと思い、宮司が榊を切り、紙垂を付けて拝殿前に置くようになりました。徐々に参拝者が増えていき、毎月約百組準備していたそうですが、参拝者が多い時には準備をした榊が無くなり、補充することもあったそうです。

現宮司が就任した令和五年からは、宮世話と敬神婦人会が榊の準備を手伝う事を申し出られ、現在



では月末に宮世話が榊を切り、敬神婦人会の会員が紙垂をつけています。月次祭は朝六時半肅行ですが、参拝者は早朝よりお参りし、神棚用の榊をお持ち帰られています。

朔日参りの参拝者に榊をお渡しすることに、宮司は、「地域の方々が氏神さんにお参りをして頂き、氏子さんと神社の距離をより近くするために始まった事ですが、前宮司の時代は家族総出で月末に慌



ただしく準備をするような状況で大変でした。現在は宮世話さんや敬神婦人会の皆様にご奉仕頂きながら、先々代から始まった事が今日まで続けていられていることを感謝しています。今後も、地域の皆様方に愛され見守られる鎮守の森の社であり続けていきたいと思いたいと思います。」と述べられました。



『結城神社のしだれ梅』

緑のコーナー

結城神社（宮崎吉史宮司）は南北朝時代の猛将・結城宗広公を祀る神社です。延元三年（1338年）、宗広公が伊勢国安濃津で没した後、小祠と六体地蔵が地元民により建立され、「結城塚」と称され祀られました。文政七年（1824年）、津藩九代藩主・藤堂高兌により小祠の近くに新たな社殿が造営され、津八幡宮の北半分が「結城神社」となりました。明治15年に別格官幣社に列格し壮麗な社殿を誇りましたが、昭和20年の津大空襲により焼失しました。



創建以来、津藩や国家の庇護を受け栄華を誇った結城神社ですが、戦後GHQ統治下で国家からの援助が途絶え、神社運営は困難を極めました。氏子を持たない神社であったものの、地元の町々をはじめ、全国の結城氏の末裔や松下幸之助など財界人らの支援によって復興が進み、昭和31年に第1期社殿復興、昭和33年に第2期社殿復興、昭和62年の宗広公650年祭に伴う社殿整備によって復興が完了しました。

戦後は「地域に根ざした神社」として歩みを進め、昭和22年には焼け残った神饌所を式場に県下でいち早く神前結婚式を挙行了しました。また奉納競馬や紀州犬展など、市民に親しまれる取り組みを続け、その一環として昭和45年には先々代宮司が店先で偶然見かけたしだれ梅を境内に植樹し、昭和51年に開花したしだれ梅が評判を呼び、翌年から「しだれ梅まつり」が開催されるようになりました。現在、境内の梅苑には約300本のしだれ梅が植樹され、開花時期には約3万人が訪れる名所となっております。

しかし、しだれ梅の維持には多くの手間がかかります。開花後すぐに新芽を2cm程度残して剪定する必要があり、防虫対策として薬剤散布も欠かせません。また、冬には寒肥、開花後にはお礼肥、秋には元肥といった施肥作業も必要です。さらに夏場の乾燥対策として適度な水やりや落花・落葉清掃なども行われています。このような労力を要するものの、その美しさは多くの人々を魅了し続けています。



教化にともなう原稿・ご意見を募集しています。（下記編集委員まで）

教化部長	山本	行恭（鈴鹿）
編集委員長	伊藤	峰地（三重）
委員	遠藤	玲（員弁）
〃	谷口	哲也（伊勢）
〃	中野	昇（名張）
〃	溝脇	斉（上野）
〃	中村	哲人（桑名）
〃	駒田	親史（一志）
〃	原	忠照（神社庁）

御社名欄にご利用下さい。

発行 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 令和7年6月30日